



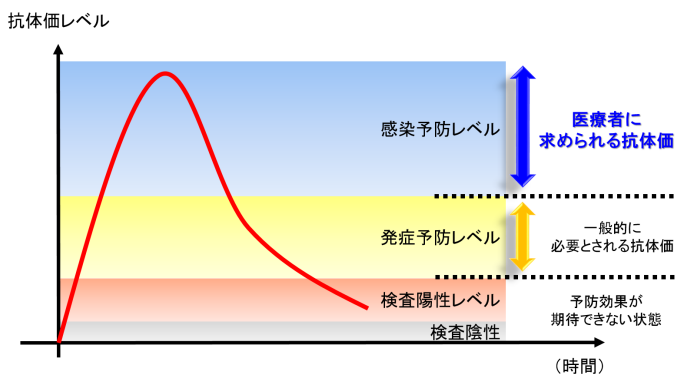
### (1) 流行性ウイルス疾患とは

流行性ウイルス疾患とは、空気感染もしくは飛沫感染し、周囲への拡散能力の高いウイルス感染症の総称です。代表的な流行性ウイルス疾患として、**麻疹(はしか)／風疹／流行性耳下腺炎(ムンプス)／水痘・帯状疱疹**が挙げられますが、これらはすべて**ワクチンで予防可能なウイルス疾患(Vaccine Preventable Disease, VPD)**です。地域社会での流行を防ぐためにワクチン接種による予防が推奨されており、現在、流行性耳下腺炎以外のウイルス感染については小児の定期ワクチンスケジュールに組み込まれています。しかし積極的なワクチン接種にも拘わらず、実際にはこれらの流行を完全に抑制することは難しいのが現状です。2015年、日本はWHO(世界保健機関)より麻疹排除国と認定されましたが、2016年8月に麻疹が関西国際空港で一時的な流行をしてニュースとなったことは記憶に新しいと思います。風疹は、妊娠初期に感染することで先天奇形を引き起こす可能性が高く、社会問題となっています。さらに今年は成人・小児の間で流行性耳下腺炎が大流行しています。

### ワクチンでの予防が可能な流行性ウイルスの疾患画像

### (2) 院内感染対策としてのワクチン接種は感染予防レベルの抗体価維持が目標

特定のウイルス感染症に対する免疫の有無を確認する方法としては抗体価測定が一般的で、血液中の抗体量によって曝露時の感染・発症リスクは以下のように推測されます。



#### ①感染予防レベル

ウイルスに曝露しても感染が成立しない

#### ②発症予防レベル

通常発症予防可能だが、曝露量が多いと感染が成立する可能性がある

#### ③検査陽性レベル

抗体はあるが、発症を予防するには不十分

通常は発症予防レベルの抗体を獲得することが目標です。しかし**医療者の場合、診療を通した**

**罹患リスクが高く、罹患した場合、免疫状態の低下した患者に感染させる可能性があるため、通常よりも高い抗体価(=感染予防レベル)を獲得・維持することが求められています。**

### (3) 当院での対応

これまで当院では、入職時にこれら4疾患の抗体価を測定し、不十分の場合にはワクチン接種を行ってきました。しかし、ワクチン接種後の抗体価測定をしないため、ワクチン不全(ワクチンによる抗体の産生が誘導されないこと)が誰にどの程度起こっているのか不明でした。また、ワクチンにより一度十分な抗体が産生されても、一定の時間が経過すると徐々に体内の抗体価は低下する可能性があります。このように入職時のみの抗体検査およびワクチン接種では、感染予防レベルの抗体価を継続的に維持できているか不明でした。そこで現在、すべての職員が感染予防レベルの抗体価を維持できるように、抗体検査・ワクチン接種体制の見直しを行っています。来年度より検査・ワクチン接種の機会が増える可能性があります、ご理解とご協力のほどよろしくお願いいたします。